

まえせつ  
前説  
～安全文化と安全目標～

令和7年11月14日

荻野徹

# 1 安全文化はどこにあるか

- 安全文化（の維持・向上）は、なんらかの危険性を内包する業務（継続反復して行われる人の社会的な活動）において広く必要とされる。
- たとえば、次のような心配事は、原子力に固有の問題ではない。
  - ✓ ルールを作っても、守る気がないなら意味がない。明確な違反でなくとも、ルールの形にだけ従い趣旨が実現されないのなら、同じこと。（ソフト面の課題）
  - ✓ 安全のための設備・装置・システムがあっても、使わない／使えない／役に立たないのでは意味がない。（ハード面の課題）
  - ✓ 事故など起きるわけがないと慢心すれば、現状における「欠け」に気づくはずがない。（変化の問題）
- 安全文化の「定義」や「構造」を論ずる以前に、目の前の組織体の（劣悪な、あるいは優れた）安全文化が存在する（心配ごとの有無、種類、属性等によって気づかされる）。

## 2 安全文化を議論する意味（はあるか）

- 原子力の分野に限っても、安全文化は、RIPB規制や、ROPといった規制の「進化」に伴って生じた課題ではなく、より一般的な問題のはず。原子力利用がスタートしたその日から必要だったもの。
- 単なる安全文化の「意義」の強調（「安全文化は、何々の大前提」の類）に、実践的意味はない。安全目標が成熟（テストに合格）したから次のステップに進む、というものではない。
- 安全文化に特化した議論は、思考停止を生じさせかねない（自己満足、あるいは逆に、一億総懲悔的な無責任）。

### 3 意味があるとすれば、、、

- 安全文化なるものを、人為的に変化（改善）させられるかどうかが、ここで重要な課題。（観察・評価くらいはできそうだが、次の一手は？変わらないという立場もある。）
- （安全文化の「定義」のいかんにかかわらず）前述のような「心配ごと」をなくす／減らすための具体的な手立てがあるのか、あるとすればそれはどのようなものか、という問い合わせであれば、議論するに値する（実践の役に立つ答えが出てくる）かもしれない。

## 4 安全文化と安全目標の「関係」（社会にとって）

（原子力分野の専門家の思考とは別に社会的な（一般人の）視点から見て）

- 大事なのは、原子力施設の安全性に影響するであろう安全文化の維持・向上（心配ごとの解消）
  - ✓ 安全目標の導入がそれに寄与する（可能性がある）のであれば、両者の関係を論じる実益はある。
  - ✓ 安全目標の導入の前提としての安全文化は何かという問立てでは、安全目標の導入を所与のものと思わない立場（一般人）からは、議論の実益を見出しがたい。
- たとえば次のような議論は可能なのか
  - ✓ 安全目標を導入しようとすると、その過程で安全文化の向上に取り組まざるを得なくなるとか（付随的な効果）
  - ✓ 安全目標の導入してリスク情報活用を進めると自ずと安全文化の程度が見える化され、その改善につながり得るとか（反射的な効果）

## 5 或る希望的観測

- 主張の例：安全目標の導入は、安全文化の見える化つながる。
- ストーリー
  - ✓ 安全文化の維持向上は決定的に重要だが、安全文化そのものを定量評価することはできない。精神論に終始するか、規則遵守至上主義に出する危険が大きい。
  - ✓ 安全目標の導入による具体的な取組（「リスク情報活用により施設の安全性を定量的に表現し、これを安全目標と比較する」、「リスク情報事態の精緻化のため、シナリオの”欠け”を探し続ける」等々）のいくつかは、安全文化のtraits の客観的な「判断材料」となりうる。
  - ✓ 安全目標の導入と活用を企図し、準備し、試行し、試行錯誤を続けるといった過程 자체が、traitsの判断材料の供給源となる。
  - ✓ これにより、安全文化の「見える化」が促進される。世間の目という圧力が、精神主義や規則遵守至上主義（いずれも自己満足である）を抑制する（はず？）。